
武装警察真選組...喪失

神風 椿

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

武装警察真選組：喪失

【Nコード】

N7730A

【作者名】

神風 椿

【あらすじ】

只今の連載のあらすじ：江戸で流行中の新型ウィルス。それは記憶喪失を引き起こす恐ろしいウィルスだった。

…とは名ばかり編其の巻「こんな奴らなんです」

今日も朝日が屯所を照らす。

武装警察真選組。

この名を知らない者は江戸にはいない。泣く子も黙る局長近藤勲。鬼の副長土方十四郎。一番隊隊長兼真選組一の剣の使い手沖田総悟。この三者が中心となり活動するこの真選組は攘夷志士の間では、幕府に染まった芋侍集団。幕府の犬と批判を受けている。しかし実力は本物。これまでも名のある攘夷志士を捕らえてきた実力派警察。

と、こういう説明だけだと。どんな凄い奴らだと思うだろう。しかし、彼らの本性はこの説明からはかけ離れているのだ。

「やあーまさきイイイ！いい加減ミントンやめやがれこの野郎オオオ！ー！」

「ぎゃああああー！！」

鬼の副長の部下への罵声が響き。

「トシイイイ！またお妙さんに愛をもらったぞオオ！」

泣く子も黙る局長の沈痛なる愛の叫び。

「死ねエエエ！土方アアア！」

「ちよっ、総悟コノヤロオオオ！！」

一番隊隊長の副長への反乱の爆音。

様々な叫びや血や爆音が飛びかう真選組は。

説明とは似ても似つかない奴らなんです。

其の壱「こんな奴らなんです」

朝早くから響いた雑音爆音が止み屯所が沈黙に包まれる。しかし、その沈黙もこの副長によって破られることになる。

「おいてめえら、今日の新聞はすでに読んだと思うが、おめえらをこの会議の間に集めたのは一つの記事についてだ」

会議の間に集められた真選組全隊員隊長。ある者はぐくりと息を呑み。ある者は新聞読んでないと後悔していた。全員黙って副長の言葉を待つ。そして副長が紫煙を吐くとき一気に緊張が高まる。

「良いか、これは時間との勝負だ。気合い入れろよっ」

真選組出勤らしい。全隊員全隊長が立ち上がり副長の案内によりあ

る場所にむかった。

『大江戸ストアだけの特別タイムセール！！調味料全品五十%オフ！お一人様三品まで！さあさあお買い得だよー！！』

「よっしゃあ！おいてめえらわかってんな？！マヨネーズを全隊員三個持ってレジに並べエー！！」

全隊員思う。

江戸は今日も平和ですね。

まあ、こんな奴らなんです。

其の式「爆弾魔より恐れるもの」

江戸の歌舞伎町。タチの悪い事件が相次ぐ歌舞伎町。真選組は見回りを欠かさない。今日も副長土方と一番隊隊長沖田が見回りをしていた。この二人は歌舞伎町でよく見られる。そしてこんなやり取りもよく見られる。

「土方さん、こんな見回り意味あるんですかい」

真剣に見回りをする土方の隣で沖田が欠伸をしながらそつと言う。黙ってやれと土方が溜息を吐きながら静かに言い返す。まあこんなのは序の口といえよう。彼らの本性はここからだ。

「そついや土方さん、土方さんの隊服って酸っぱいですよねい」

隊服をまじまじ見ながら沖田が呟く。その呟きが土方にとって気になる一言らしく沖田のほうを向く。

「あ？なんでだよ」

「なんでって土方さんってマヨが好きすぎて、隊服を漬けてるんですよ、マヨに」

「んなわけあるか、いくら好きって言うてもそこまでじゃねーし。そこまで言ったら変態だ」

「！？」

「！？、じゃねえ！なんだその“え、変態じゃん”と思ってそうな

表情！」

「うるせえですねい。変態は我ら真選組には不要でさあ。逝ねや」

「総悟つ？え、ちよぎやああ！！」

この二人の撒き添いになる民家も少くない。ってか。

爆弾魔より怖い。

其の式「爆弾魔より恐れるもの」

局長の元にはいつも数知れぬ報告書が回ってくる。

しかしその九割は副長土方が面倒を見ている。今日も土方の元に被害届けや報告書が回ってきた。土方は一つ一つ欠かす事無く目を通し処理を行なう。しかし、土方は正直うざんりしていた。この被害届けや報告書が攘夷や市民の喧嘩などならばやる気が出て仕事にも精が出るだろう。しかし。いつも見るのは。

加害者：真選組隊員

の文字。この正体を知る副長だからこそ仕事に精が出ないのだ。ほら、また一件、民家が破壊。見に覚えのある土方は冷や汗を垂らし

ながら思つ。

警察ってなんだろうな。

ほらほら、また一件。

真選組副長、土方の紫煙混じりの溜息が尽きることとは永遠にないかもしれない。

今日も江戸は警察によって破壊されていく。

其の三「でも頼りにはなるんです」

ここは江戸の中心街。

人々が活気の溢れ店も多く、そして事件も多い。歌舞伎町ほどではないがこの中心街でもタチの悪い事件が多発するのだ。勿論真選組はこの見回りも欠かさない。いつ事件が起こるかわからないこの世の中、真選組はいつでも周りに気を配りとっさに対応できるようにしている。そして、今日も屯所に隊員からの通達が入ってくるのだ。

『甘味屋さきちゃんて人質事件！至急応援を！』

其の三「でも頼りにはなるんです」

場所は変わって甘味屋さきちゃん。たった今副長も到着し辺りには異様な空気が流れる。副長が煙草に火を点け女を人質にとっている犯人の男を見つめスピーカーを手に持つ。

『おいっ、馬鹿なマネはやめとけ。お前は完全に包囲されてるんだぜ、あきらめて人質解放して武器を捨てて出てきやがれ！』

副長の声に戻ってくるのは男の怒りの声だけだ。どうやら、心中を図っているようだ。仕事が上手く行かず社会から、幕府からも捨てられしまいには、家族にまで捨てられた。男の精神は様々なダメー

ジの重なりで狂ってしまったらしい。

「近づくなよ！近づいたらこの女と共に吹っ飛んであの世に逝ってやる！」

かなりの興奮状態。副長はただただ溜息を吐くばかりだった。なんて有りがちな理由なんだ。副長はスピーカーを握り締めあまりにもありきたりな理由で死のうとしている男に再度呼び掛ける。

『じゃあ死ぬ。あ、死ぬ前には今から死ぬぞって叫べよ。ここにいる野次馬や俺等を避難させねーといけねえから』

副長の言葉に今まで騒いでいた野次馬が人質が犯人でさえ固まった。あまりにも悲痛な言葉。犯人は焦った。

「ほ、本当に死ぬぞ？」

『だから、死ねば良いじゃねえか。けどな、お前は地獄にも天国にむ逝けねえ、なんでかわかるか？』

犯人が茫然としながら武器を下ろし副長の話に耳を傾ける。

『いいか、お前は死ぬ死ぬ言ってるがまだまだこの世には未練があるんじゃないのか？』

「未練…？そんなものは…」

『じゃ、俺から見えるその指輪はなんだ』

きらりと光る左手の薬指。そう、結婚指輪が副長の目には見えたの

だ。犯人はとつさに人質を放し右手で左手の薬指を隠す。副長はこの瞬間を見逃さなかった。

『一番隊！犯人を捕らえろ！』

副長の指示が通リ話の間に店裏に潜んでいた一番隊が犯人を一瞬で取り押さえる。犯人は抵抗したが時すでに遅し、手首には手錠が付けられていた。

「くそっ！土方めエエ！すべては作戦か？！」

犯人は副長に詰め寄る。副長は溜息を吐き犯人の殴り掛かる手を受けとめる。そして真っすぐ犯人を見つめこう言い放った。

「俺は演技が苦手だな、あれは素だ。嘘は言ってねえよ」

犯人の表情は一気に崩れその場で泣き叫んだ。そしてまもなくして連行された。真選組は破壊活動を活発に行ない、毎朝屯所からは騒音が響く迷惑な警察。しかし、その迷惑な警察のおかげで今救われた命があることを知ってほしい。

真選組、頼りになりたいときは、頼りになるんです。

後日談だが、あのあと真選組の捜索により犯人の妻を発見。どうやら妻も未練があったらしく、指輪を捨てるに捨てられなかったらしい。あの事件から一年と半年。夫婦は今この江戸で新しい命と共に幸せに暮らしている。

…喪失其の一「だ、れ…？」（前書き）

この話から完璧にストーリー化したします。そして一部CPな部分があるかも知れません。それを含めた上でご覧ください。

…喪失其の一「だ、れ…？」

最近真選組内で妙な噂がたっていた。

それは江戸の住民に記憶喪失者がここの所爆発的に増えているらしい。

それは大江戸病院が緊急記者会見で明らかにしたことですぐに真選組の耳にも入った。話によると新型のウィルスかもしれないと大江戸病院は発表したらしい。しかし症状は短期間で一週間以内にはすべてを思い出さらしい。なので落ち着いて対応して様子がおかしい、一週間で思い出せない様子ならばすぐに病院まで。これが記者会見の大体の内容。幸いにも真選組内では発病者はいない。しかしその油断が、人を病へと陥れるのかもしれない。

喪失其の一「だ、れ…？」

此処は会議の間。真選組全体がこの日の見回り番や門番、突撃の時の作戦などを練るために集まる場だ。そして今日も真選組は会議の間に集まっていた。ある一人の男を除いては。

「遅い…」

腕を組み唸るのは中心人物近藤局長。そしてその隣には退屈そうに欠伸をする沖田隊長。

「まあーったく…何時まで待たせる気なんدي」

仕方ねエ人だと溜息を吐き近藤の方を見る。近藤も心配しているようにうでそわそわしながら腕を組んでいた。その待ち人はこれまで会議に遅刻などしてこなかった。それどころか遅刻してきた奴には切腹を申し付けるほどの真面目な奴。近藤は腕時計を見つめふうと溜息を吐きその場に立ち上がった。

「やっぱり変だ、様子を見てこよう」

部屋を出ていこうとする近藤の足を止めさせたのは沖田の手だった。近藤の腕を思いつきり掴み目で俺も行くと言えかけていた。近藤は静かに頷き再び足を踏みだし、沖田は手を離し黙って近藤のあとを追った。

そして二人はある部屋の前に立つ。その部屋のプレートには“副長室”と記されていた。そう待ち人とは副長土方だった。あの真面目な土方が会議に遅刻なんてと全隊員が信じられなかった。のでも立ってもいられなくなり近藤と沖田は今この部屋の前にいる。

「トシート、起きてるか？どーしたんだっ」

襖を叩く近藤に沖田は溜息を吐き開けますぜーと中にいるはずの人物に声を掛け襖を開けた。

「土方さん、朝ですぜ…」

沖田と近藤が目にしたのは布団の上で茫然と座っている土方の姿だった。近藤は急いで土方の傍に寄る。沖田も唯事ではないと察し土

方の傍に寄る。

「トシッ?どうしたっトシ!」

「土方さん?」

二人の声掛けが聞こえたのか土方はゆっくりと二人を見つめるが、その目は本当に二人を映しているかわからないほど濁っていた。そして土方は本当に小さな声で二人に向かって呟いた。

この一言が全ての始まり。

「お前等は…だ、れ…?」

其の貳「俺とお前だけの秘密」

土方の言葉に二人はただ固まるしかなかった。こんな事があるのだろうか。何かの間違いではないかと、しかし現実には二人の思い通りには行かない。土方はただきよとんと濁った目で二人を見つめる。二人はこの土方を責める事が出来ず近藤はただただ抱きしめるだけ。沖田もただただ拳を作るだけ。

「トシ…」

近藤の心の叫びのような一言は土方には届かず土方はただ茫然としていた。きつと今だ理解が出来ていないのだ。自分は何で此処にいるか、何でこの二人は自分を“トシ”・“土方さん”と呼ぶのか。何で二人は震えているのか。記憶の無い土方には到底理由など考えもつかずただ首を傾げるだけだった。

「近藤さん、やっぱりアレですかねイ？ほら大江戸病院が言ってた」
今だ土方を抱きしめる近藤に問いかけた。すると近藤はそつと土方を布団に寝かせた。そして沖田にこう言い放つ。

「この事は俺とお前だけの秘密だ」

沖田は一瞬驚いた表情になったがすぐに頷いた。何故ならこの事が真選組全体に広まったら真選組は混乱状態におちる。それを一時的にも、この病気が治まるまで防がねばならない。近藤は立ち上がり土方に優しく声をかけた。

「お前は土方、土方十四郎。俺達の仲間、いや家族かな…？」

近藤が優しく言って安心したのか土方は少し表情を明るくしそうかと一言だけ呟く。その様子にほっと胸を撫で下ろした近藤は沖田に病院に行くと言げ土方を着替えさせた。沖田は部屋を去り会議の間で待つ隊員達に土方は軽い過労なので暫く顔は出さないと伝えた。そして、沖田に隊員は任せ二人は静かに屯所を抜け出し大江戸病院に向かった。

澄み切った青空が上空に広がる此処江戸。その中心街を二人は歩いた。近藤はわざと車ではなく歩いて大江戸病院に向かった。少しでも早く記憶を取り戻して欲しい、その一心だった。

「此処はな、俺達が護る江戸だ」

「護る…」

近藤の護るという言葉に反応し土方は近藤を見つめる。視線を感じた近藤は土方の方を向きニツと笑う。

「俺達は真選組、この江戸を護るため戦うんだ」

「真選組…か」

心が無情に反応したとしても、土方の中には記憶が無い。だから何で反応したのかもわからない。でも何となくだが土方の中に近藤への尊敬心が少しずつだが芽生え始めていた。

場所は大江戸病院に移る。病院内は久しぶりの平和に包まれ看護婦や医師達も暫しの休息を楽しんでいた。近藤は土方を受付前のソファに座らせ受付へと走った。一人になった土方は溜息を吐き初めての病院を見渡す。その時土方の隣に一人の男性が座り込んだ。土方は自然にその男に目をやった。そしてふと目が合ったのだ。

「ど、どうも…」

相手が頭を下げ挨拶をしてきて土方も慌てて挨拶を返す。すると相手が少し話し始めた。

「あの、もしかして何処かで会ってますか？」

相手が困った様子で問いかけてきて土方は慌ててスイマセンと返す。

「自分、何も覚えてなくて…ついさっき近藤さんに名前を教えて貰ったばかりなんです」

相手は驚いた目で土方を見つめる。そして偶然ですねと言い土方を見つめる。

「自分も何も覚えてない身で、先程志村さんに教えて貰ったんです」
へえと土方は少しだけ表情を明るくし名前はと問いかける。そして相手は少し恥ずかしそうにこう言った。

「坂田銀時です」

「俺は土方十四郎って言います」

其の参「嫌な予感」

「トシッ行くぞー！」

土方は近藤の声を聞き付け今行くと返しその場に立った。そしてふと銀時に目をやり少し笑う。

「じゃあ、坂田さん。俺呼ばれたんで」

「はい、さようなら土方さん」

軽く相手に手を振り近藤の元へと急いだ。近藤は土方を笑って受けとめ目を合わす。すると近藤が先程の会話を見ていたのだろうか何話してたんだと問い掛ける。土方はああと表情を少し明るくし近藤の方を見る。

「あの坂田さんも記憶がないんだ。だから少し解り合えたような気がして楽しかった」

坂田という言葉に反応し近藤は万事屋を思い出した。そしてあそこもかと溜息を吐きながら病室の扉を開け中に入る。椅子に座り土方も医者と目を合わす。

「えー、今までの記憶が全くないと、それは何時からですか？」

流石に慣れてきたのか医者は冷静に淡々と土方に問い掛ける。土方は少し困った様子で近藤を見る。近藤は慌てて医者に伝える。

「あ、今日の朝からです……」

ふむ、と医者はペンを手放し間違いないでしょうと近藤に言う。

「これは完璧に今流行の記憶喪失ですね。まあ今は様子を見るしかないでしょう、今までの症例なら一週間ぐらいで元に戻るでしょう」

大体の説明を受け二人は病室を出た。その時。

「あ、土方さん」

「坂田さんっ」

新八と共に診察を終えた銀時に会った。土方は軽く頭を下げ銀時と目を合わせる。新八は不思議そうに土方を見る。そして近藤と目を合わせ近づく。

「まさか、土方さん…」

問い掛ける新八に近藤は渋々頷く。そして今までなら考えられないほど仲良さそうに会話を弾ませる二人を見て現実であることを思い知らされた。

「お帰りのせエ近藤さん、土方さん」

門前で待っていた沖田が二人に話し掛ける。近藤は笑顔を作り沖田におおと返す。土方は今だぎこちなく少し小さめにたたいまと言った。その様子に沖田は少し肩を落としたがすぐに笑顔を作り土方を寢室へと運んでいった。近藤は何故か嫌な予感に頭が包まれながら

会議の間へと足を進めた。

其の四〔鬼になる前〕

土方が病にかかり二日目の朝。土方はゆっくりと体を起こし周りを見渡す。寝起きで頭が働かず暫し茫然と虚ろな目で壁を見つめる。なかなか目覚めぬ頭を揺らしながら再び布団に体を任せるように倒れる。そして再び襲い掛かる眠気。土方は目蓋を閉じようとした。その時。

「副長ー、大丈夫ですかー、山崎ですー」

其の四〔鬼になる前〕

重い目蓋を上げ聞き覚えのない声に耳を傾ける。少し首を傾げながらも体を起こし襖を開ける。襖の先には少し安心そうな表情を浮かべる土方にとつて見知らぬ男が立っていた。山崎は優しく笑いほつと息を吐く。土方は少し戸惑いながらも何だと問い掛ける。すると山崎はポケットから薬を取り出し、そつと土方に持たせた。

「過労によく効く薬です。俺一応医療の方にも首突っ込んでるしもし宜しければ」

土方は驚いた様子で受け取った薬を見つめる。そして不思議と嬉しい気持ち膨らみ笑顔で山崎を見つめ。

「有難う、山崎」

初めて見よう土方の笑顔に驚き目を開き焦ったように言い放つ。

「いいえ！副長の部下として当然のことをしたままで…でわ！」

山崎は逃げるかのように走り去っていった。土方は暫し啞然としながらも山崎への恩を再確認するように薬を握り締めた。その時向こうから沖田が土方に駆け付けた。

「あ、えー…と沖田」

「総悟でいいです。そっちのほう慣れてやす。それよか土方さん、記憶が戻るまであんまり隊員とは関わるなって言ったるイ？皆には過労って言ってるんですから」

腕を組みながら言う沖田に土方は少し肩を落とし悪いと言い山崎から貰った薬を握り締めながら部屋に戻っていった。沖田は少し言いすぎたかとゆっくり寝付く土方に近付きしゃがみ込む。そして少し申し訳なさそうに言う。

「すいやせん、まるで土方さんを閉じ込めてるみてエで。窮屈かとは思いますが…」

「いいよ、俺のためだし、それに真選組に迷惑が掛かるんだろ？なら辛い、だから気にしないでいいんだ」

滅多に見せぬ土方の優しい笑顔に沖田は暫し口を閉ざす。総悟？と問い掛けてくる土方の声で我に返りそうですかイとこちらも笑顔を作り土方を残し部屋をあとにした。

「やっぱり、あの人は記憶を無くしても中身は変わらねエんですね
イ」

土方が鬼になる前の道場時代を思い出しながら沖田は一人思った。

「今日も、江戸が平和だったら良いねイ」

屯所から見える朝の江戸を見て沖田は静かに呟き副長がいない初めての会議へと足を進ませた。

其の五「誰が泣いてやるかい」

『何してんでイ』

あれは俺が幼い頃。

土方さんがまだ道場に来て間もない頃だった。土方さんはまだ俺達には心を開かず、自由な表情を見せるのはあくまで近藤さんの前だけだった。当然俺のことも受けとめてはくれない時期だった。そんなある日道場にある一本の木刀を構える土方さんの姿があった。いつのまにか声を掛けていた俺はそつと土方さんに近づいた。

『別に』

そつぱを向き木刀をその場に置く。俺はその木刀を手に少し構えてみる。

『俺一応師範のジジイに見込まれたんだぜすげえだろイ』

土方さんは俺を見つめそつと溜息を漏らす。すると不思議と手が動き木刀を土方さんの首に突き付けた。土方さんは敵を見るような目で俺を見つめなんだと問い掛けてきた。

『一回、お手合わせを願いてエんだが』

其の五「誰が泣いてやるかい」

『かー、負けたぜイ』

俺は息切れをしながら見事一本取られた頭に手を当てながら竹刀をその場に置いた。落ち着いた様子で防具を脱ぐ土方さんに何故かいらつき俺は飛び掛かった。土方さんはそのままバランスを失いその場で俺と共に倒れた。

『何しやがんだ餓鬼』

『餓鬼じゃありやせん、俺には沖田総悟っていう立派な名前がありまさア』

ああそうかいと土方さんは呆れながら溜息を吐きそっぽを向いた。その時不思議と土方さんを知りたくなった。近藤さんにしか見せないあの表情も欲しくなった。

『決めた、明日からアンタ俺の稽古しろイ』

『ハア?! 何でだよ! 師範にしてもらってんだろ? だったらそれでいいじゃねーか』

『それはそれ、これはこれでイ、とりあえず宜しくお願いしますぜ土方さん』

あの時初めて土方さんは表情が豊かなことを知った。あなたは俺を暫し睨んでいたが仕方ねえなと澁々了解してくれた時もさり気ない優しさがあることにも気が付いた。今思えばあの時稽古を付けてくれと言っていなかったら今の親しさはなかったのだらうと思う。

「総悟？」

近藤さんに声を掛けられ自分は今見回り中のことに気付きすいやせんと近藤さんに言う。思い出に浸りすぎた、俺は心のなかでそう呟き近藤さんより一歩前に出る。

「んじゃ、近藤さん。一足先に帰って土方さんの様子を見ておきま
さア」

近藤さんの返事を聞かず俺は走りだした。

今の貴方に記憶はない

でも、俺の中にある貴方との記憶は消えはしません

貴方があと数日ですべて思い出した時俺は泣くでしょうか

「誰が泣いてやるかい、笑ってやりまさア」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7730a/>

武装警察真選組...喪失

2010年10月13日21時09分発行